

P1-021

社会的認知理論を応用した親子防煙教育プログラムの効果

川端 智子

滋賀県立大学 人間看護学部 人間看護学科

【目的】 今まで未成年に対する様々な防煙教育プログラムが実施されてきたが、子どもが親の喫煙に対する態度や考え方に影響を受けるという点に着目したものはない。

本研究の目的は、社会的認知理論を応用した親子防煙教育プログラムを実施し、効果を明らかにすることである。

【方法】 2018年に研究協力が得られたAおよびB小学校の6年生89人とその保護者を対象とした。授業実施前後に自記式質問紙を配布し、担任及び養護教諭を通じて調査した。質問紙は、属性、喫煙状況、加濃式社会的ニコチン依存度調査票(KTSND)等で構成した。授業内容は、主にタバコの害や依存性、受動喫煙の危険性、タバコの断り方のロールプレイ、ストレス解消方法等であった。教育効果は、KTSNDの得点差を用いてノンパラメトリック検定を行った。本研究は、A大学倫理委員会承認後実施した。

【結果】 質問紙回収率は、92人中89人(有効回答率96.7%)男児49.4%、女児50.6%、保護者は92人中46人(有効回答率50%)であり、男性21.7%、女性78.3%であった。児童は全員喫煙経験がなかった。KTSNDの総得点は、授業前総得点5.89(±5.13)から授業後総得点4.29(±4.82)となり有意差が見られた($p < 0.01$)。

保護者の平均年齢は、42.2歳(±4.39)、喫煙者の割合は、毎日吸う13%、やめた13%、吸ったことがない73.9%であった。KTSNDの総得点は、授業前総得点12.76(±5.96)から授業後総得点9.57(±5.6)となり有意差が見られた($p < 0.01$)。これまでの受講経験の有無は、ある8.7%、ない80.4%、どちらともいえない10.9%であった。保護者の喫煙者、非喫煙者のKTSNDの総得点は、授業前総得点は喫煙者19(±61.4)非喫煙者11.8(±5.41)であり有意差が見られた($p < 0.05$)が、授業後は有意差が見られなかった。これまでの受講経験の有無での比較では、授業前後いずれもKTSNDの総得点に有意差は見られなかった。

【考察】 本プログラムの効果は、KTSNDの値が変化したことから一定の効果があつたと考えられる。特に、保護者が喫煙者である場合、授業前のKTSNDの値は非喫煙者である場合に比べ有意に高かったが、授業後は喫煙者、非喫煙者の認識に有意差がみられなくなった。このことより、喫煙する保護者を巻き込み、プログラムを実施することの有効性が示唆された。しかし、これまでの受講の有無でKTSNDの差はなかったことから、定期的な介入が必要であると考えられる。

P1-022

子どもの「読み聞かせ行為」における犬(動物)、犬型ロボット介在の心身への影響—フェイスリーダーを用いた感情測定—

柚山 香世子、井上 映子、後藤 茂、後藤 武、大森 直哉

城西国際大学 看護学部 看護学科

【目的】 近年、アメリカで開発された「R.E.A.D (Reading Education Assistance Dogs) プログラム」が日本でも行われ始めている(大塚, 2016)。今回、このプログラムを参考に、犬や犬型ロボット(AIBO)に本を読み聞かせる行為を通じた子どもへの精神的・生理的な影響を明らかにし、介入による教育効果を検討した。

【方法】 家族と子ども(犬へのアレルギーのない)の両方に同意が得られた1~4年生の子ども8名に、国語の教科書で読み聞かせ(「犬群」「AIBO群」「一人読み群」)を1人3種類、1回ずつ実施した。クロスオーバー・デザインにて、1回毎に2週間のウォッシュアウト期間をあけ、ランダム化した順序で行い、評価は各読み聞かせ前後で実施した。生理学的指標は、唾液アミラーゼと血圧・脈拍、感情は、ビデオ撮影した表情をFaceReader TM Ver 8を用いて解析し、簡易アンケート調査も行った。統計解析には、SPSS Ver 25.0を使用し、介入前後での各測定値の比較はWilcoxonの符号付き順位検定、3群の比較にはKruskal-Wallis検定、2群比較にはMann-Whitney検定にて分析し、優位水準は0.05%とした。本研究は、城西国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果及び考察】 対象は知的障害のない2年生5名(男2名、女3名)、3年生2名(男女各1名)、4年生1名(女子)の計8名。「一人読み群」は、脈拍($p = 0.035$)、収縮期血圧($p = 0.035$)が介入後有意に低下し、拡張期血圧は有意に上昇した($p = 0.034$)。「犬群」「AIBO群」は介入前後で有意な変化がなかった。また、「一人読み群」の介入後の収縮期血圧は、他の群と比較し有意に低値であった($p = 0.033$)。感情は、「AIBO群」においてSadスコアがpre0.269 ± 0.246、post0.222 ± 0.232と有意に低値($p = 0.017$)となり、「犬群」においてSurprisedスコアはpre0.035 ± 0.029、post0.019 ± 0.024と有意に低値($p = 0.028$)になった。「一人読み群」は、すべての感情に変化がなかった。以上の結果から、子どもの読み聞かせ行為において、犬やAIBOを対象にした適度な刺激がネガティブな感情を低減させるため、読み聞かせの継続的な学習には、このような刺激の必要性が考えられる。